

## 日本語方言の多様性—アクセントの地域差—

木部 暢子 (国立国語研究所)

### 要旨

日本語は、アクセントの地域差が大きいことで知られている。例えば、「雨」は東京方言でアメ (ame), 京都方言でアメー (amee) 鹿児島方言でアメ (ame) と発音され、「飴」は東京方言でアメ (ame), 京都方言でアメ (ame), 鹿児島方言でアメ (ame) と発音される。また、福島方言では「雨」も「飴」も区別がなく、アメ (ame) と発音されたり、アメ (ame) と発音されたりする（上に線を引いた部分を高く、線を引いていない部分を低く発音する）。このようなアクセントの地域差はなぜ生じたのだろうか。各地のアクセントシステムと方言間のアクセント型の対応関係を検討することにより、これらが同一の祖型から生まれた兄弟関係にあることを述べ、これらのバリエーションが生まれたプロセスについて考察する。

### キーワード

東京方言, 鹿児島方言, 京都方言, 弘前方言, 下げ核, 昇り核

### 1 アクセントの地域差の概観

日本語は、アクセントのバリエーションが豊かである。これまでの研究成果からアクセントの地域差を概観してみよう。



図1 杉藤美代子 『日本語アクセントの研究』を参考に作成

図1を見ると、全国は大きく(1)京阪式アクセント、(2)東京式アクセント、(3)二型<sup>にけい</sup>アクセント、(4)無型<sup>むけい</sup>アクセントの4つに分けられている。以下では、京都方言（京阪式アクセント）、東京方言、弘前方言（東京式アクセント）、鹿児島方言（二型アクセント）の4方言を取りあげ、まず、それぞれのアクセントシステムを概観し、次に、それらの異同について考察し、最後に、それぞれのアクセントがどのようにして形成されたかについて考える。

## 2 東京方言のアクセント

最初に東京方言を取りあげる。表1は、東京方言の名詞のアクセント型のリストである（上に線を引いた部分を高く、線を引いていない部分を低く発音する）。

表1 東京方言の名詞のアクセント型

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
葉: <u>ha</u>	鼻: <u>hana</u>	桜: <u>sakura</u>	友達: <u>tomodati</u>
手: <u>te</u>	雨: <u>ame</u>	兜: <u>kabuto</u>	螻蛄: <u>kamakiri</u>
	花: <u>hana</u>	心: <u>kokoro</u>	色紙: <u>irogami</u>
		男: <u>otoko</u>	雷 : <u>kaminari</u>
			妹 : <u>imooto</u>

表1では、te (手) と ha (葉), hana (花) と hana (鼻), otoko (男) と sakura (桜), imooto (妹) と tomodati (友達) がそれぞれ同じアクセント型になっているが、これらに助詞 ga (が) を付けて発音すると、「手」「花」「男」「妹」には ga (が) が下がって続き、「葉」「鼻」「桜」「友達」には ga (が) が下がらずに続く（表2）。ここから、「手」「花」「男」「妹」の末尾には次に来る助詞を下げるという特徴が備わっている、逆にいうと、「葉」「鼻」「桜」「友達」にはそのような特徴が備わっていないと考えることができる。その他のアクセント型もピッチの下がり目の位置によって区別されている。

表2 東京方言の「名詞+ga」のアクセント

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
葉: <u>haga</u>	鼻: <u>hanaga</u>	桜: <u>sakuraga</u>	友達: <u>tomodatiga</u>
手: <u>ttega</u>	雨: <u>amega</u>	兜: <u>kabutoga</u>	螻蛄: <u>kamakiriga</u>
	花: <u>hanaga</u>	心: <u>kokoroga</u>	色紙: <u>irogamiga</u>
		男: <u>otokoga</u>	雷 : <u>kaminariga</u>
			妹 : <u>imootoga</u>

一方、ピッチの上がり目は、多くの場合、第2拍目にある（第1拍目のみを高く発音する te (手), ame (雨), kabuto (兜), kamakiri (かまきり) を除く)。このことから、ピッチの上がり目は語のアクセントの区別に関与していないことがわかる。

では、ピッチの上がり目はどのような役割を担っているのだろうか。じつは、ピッチの上がり目は、文節の作り方によって移動することがある。例えば、irogami (色紙) の第2拍目の上昇は、「この色紙」「わたしの色紙」といった連文節では、konoirogami, watasinoirogami のように、「この」「わたしの」の部分に移動する。もし、konoirogami (この色紙), watasinoirogami (わたしの色紙) のように発音したとしたら、「この」と「色紙」、「わたしの」と「色紙」の2つの文節に切れているように感じる。このことから、第2拍目の上昇は単語のアクセントではなく、句 (phrase) の始まりを表していることがわかる。

以上をまとめると、次のようになる。東京方言のアクセント型は、「ピッチの下がり目がどこにあるか (下がり目がない型も含む)」によって区別される。ピッチの上がり目はアクセントの特徴ではなく、句の始まりの特徴である。

ピッチの下がり目を「下げ核」(lowering kernel) という。これを  $\bar{\quad}$  で表記すると表3のようになる。

表3 東京方言の名詞のアクセント体系

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
葉:ha	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
手:te $\bar{\quad}$	雨:a $\bar{\quad}$ me	兜:ka $\bar{\quad}$ buto	螻蛄:ka $\bar{\quad}$ makiri
	花:hana $\bar{\quad}$	心:koko $\bar{\quad}$ ro	色紙:iro $\bar{\quad}$ gami
		男:otoko $\bar{\quad}$	雷 :kamina $\bar{\quad}$ ri
			妹 :imooto $\bar{\quad}$

下げ核は単語の特定の拍に付与された特徴で、例えば、「手」「雨」「兜」「かまきり」は第1拍目に下げ核を持つ語、「花」「心」「色紙」は第2拍目に下げ核を持つ語、「男」「雷」「妹」は第3拍目に下げ核を持つ語、また、「葉」「鼻」「桜」「友達」は下げ核を持たない語である。単語のアクセントは下げ核の位置により、次のように数字で表すことができる。

表4 東京方言の名詞のアクセント体系

アクセント	単語	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
0	葉, 鼻, 桜, 友達	○	○○	○○○	○○○○
1	手, 雨, 兜, 螻蛄	○ $\bar{\quad}$	○ $\bar{\quad}$ ○	○ $\bar{\quad}$ ○○	○ $\bar{\quad}$ ○○○
2	花, 心, 色紙		○○ $\bar{\quad}$	○○ $\bar{\quad}$ ○	○○ $\bar{\quad}$ ○○
3	男, 雷			○○○	○○○ $\bar{\quad}$ ○
4	妹				○○○○ $\bar{\quad}$

(下げ核のない型は0で表す)。

下げ核を持たない型を含めて、東京方言ではN拍語につき「N+1」個の型がある。このようなタイプのアクセントを「多型<sup>たけい</sup>アクセント」という。

### 3 鹿児島方言のアクセント

次に鹿児島方言を取りあげる。鹿児島方言の名詞のアクセント型は、表5に示すように、A型（うしろから2つ目のシラブルが高く、最後が下がる型）とB型（最終シラブルのみ高い型）の2種類である（韻律の単位は拍ではなく音節（シラブル）である）。

表5 鹿児島方言の名詞のアクセント型

	<1音節>	<2音節>	<3音節>	<4音節>
A型	葉:ha	鼻:hana	女:onago	赤蜻蛉:akatonbo
B型	歯:ha	花:hana	男:otoko	雷:kannaredon

全ての単語は、A型かB型かのどちらかに分類される。ame（飴）、sakura（桜）、tomodat（友達）はA型、te（手）、ame（雨）、kokoro（心）、irogan（色紙）、imot（妹）はB型である（鹿児島方言では、tomodat（友達）のdatやimot（妹）のmotのような閉音節が多数現れる）。

A型、B型の音調パターンは、助詞が続いても変わらない。例えば、名詞にga（が）、mo（も）、kaa（から）、den（でも）等の助詞が続くと、高い部分がうしろに移動して、A型、B型の音調パターンが保たれる（表6。kaa（から）は例外的に2音節を形成する）。

表6 鹿児島方言の「名詞+助詞」のアクセント

	単語	ga（が）	mo（も）	kaa（から）	den（でも）
A型	鼻:hana	鼻:hanaga	鼻も:hanamo	鼻から:hanakaa	鼻でも:hanaden
B型	花:hana	花:hanaga	花も:hanamo	花から:hanakaa	花でも:hanaden

鹿児島方言のように、語の長さにかかわらずアクセント型の種類がN種類と決まっている方言を「N型アクセント」という。鹿児島方言は2種類の型を持つので、二型アクセントである。

鹿児島方言のアクセントと先に述べた東京方言のアクセントを比較してみると、いろいろな点で大きく違っていることがわかる。まず、東京方言のアクセントは、特定の拍に付与された「下げ核」によってアクセント型の区別が行われる。下げ核は固有の拍に付与されたものなので、助詞が接続しても基本的には下げ核の位置が動かない。それに対し、鹿児島方言のアクセントは、句全体にかぶさる音調パターン（A型かB型か）によってアクセント型が区別される「二型アクセント」である。音調パターンは、基本的に句（文節）を単位としているので、助詞が接続して句が長くなると高い部分がうしろに移動する。

次に、東京方言は拍数に応じて型の種類が増えていく「多型アクセント」、それに対し、鹿児島方言は単語の長さにかかわらずアクセント型の種類が2種類と決まっている「二型アクセント」である。

## 4 京都方言のアクセント

三番目に京都方言を取り上げる。表7は京都方言の名詞のアクセント型のリストである。

表7 京都方言の名詞のアクセント型

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
子:koo	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
葉:haa	花:hana	男:otoko	姉:neesan
		二人:hutari	湖:mizuumi
			雷:kaminari
手:tee	松:matu	兎:usagi	人参:ninjin
	雨:ame	兜:kabuto	色紙:irogami
		マッチ:matti	息抜き:ikinuki

それぞれの型の区別には、ピッチの下がり目の位置が関与している。ただし、ピッチの下がり目だけで型を区別しようとする、表8に示したように、「二人/兜」、「湖/色紙」（いずれも2）、「雷/息抜き」（いずれも3）、「子/手」、「鼻/松」、「桜/兎」、「友達/人参」（いずれも0）が区別できなくなってしまう。それを回避するためには、もう一つ別の特徴を関与させなければならない。

それぞれのペアを見てみると、左の語（二人、湖、雷、友達、子、鼻、桜、友達）は語の最初から高く発音され、下降の位置まで高が続くのに対し、右の語（兜、色紙、息抜き、手、松、兎、人参）は語の最初が低く発音され、下降の前の拍まで低が続いている。この特徴と下げ核を組み合わせるにより、表8を表9のように改良することができる。

以上から、京都方言のアクセントは、語の特定の拍に付与された「下げ核」と語の始まりがHigh toneかLow toneかという「2つの式」によってアクセント型が区別されると整理することができる。「下げ核」を持つ点は東京方言と共通している。また、「2つの式」を持つ点は鹿児島方言の「二型アクセント」と共通している。つまり、京都方言のアクセントは、東京のシステムと鹿児島システムの組み合わせたような形を持っているのである。

表8 京都方言の名詞の下げ核の位置

アクセント	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
0*	子:koo	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
1	葉:ha`a	花:ha`na	男:o`toko	姉:ne`esan
2**			二人:huta`ri	湖:mizu`umi
3***				雷:kamina`ri
0*	手:tee	松:matu	兎:usagi	人参:ninjin
2**		雨:ame`	兜:kabu`to	色紙:iro`gami
3***			マッチ:matti`	息抜き:ikinu`ki

表9 京都方言の名詞のアクセント体系

アクセント	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
H0	子:koo	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
H1	葉:ha <sup>ː</sup> a	花:ha <sup>ː</sup> na	男:o <sup>ː</sup> toko	姉:ne <sup>ː</sup> esan
H2			二人:huta <sup>ː</sup> ri	湖:mizu <sup>ː</sup> umi
H3				雷:kamina <sup>ː</sup> ri
L0	手:tee	松:matu	兎:usagi	人参:ninzin
L2		雨:ame <sup>ː</sup>	兜:kabu <sup>ː</sup> to	色紙:iro <sup>ː</sup> gami
L3			マッチ:matti <sup>ː</sup>	息抜き:ikinu <sup>ː</sup> ki

(H: High tone で始まる L: Low tone で始まる)

## 5 弘前方言のアクセント

四番目に弘前方言を取り上げる。弘前方言の名詞のアクセント型を表10に示す。表10では名詞単独形と助詞mo(も)が接続したときのアクセントを上下に並べて示している。

助詞mo(も)が接続した場合に高く発音する部分がうしろに移動する点は、鹿児島方言に似ている。しかし、拍数が増えると型の数が増えていくので、N型アクセントではない。では、アクセント型を区別する特徴は何だろうか。

表10 弘前方言の名詞のアクセント型

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
手:te	猿:saru	狐:kitune	糠米:urukome
temo	sarumo	kitunemo	urukomemo
	花:hana	兎:usagi	手袋:tebukuro
	hanamo	usagimo	tebukurumo
		男:otoko	果物:kudamono
		otokomo	kudamonomo
			雷:kaminari
			kaminarimo
葉:ha	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
hamo	hanamo	sakuramo	tomodatimo

ピッチの下がり目の位置を見ると、多くの文節で最終拍が下がっている。先に見た東京方言では、2拍目からピッチが上昇し、それにより句の始まりを表していた。弘前方言はそれと対称的に、最終拍の前でピッチが下降し、それにより句の終わりを表していると考えられる。だとすると、弘前方言のアクセント型の弁別要素は、ピッチの下がり目ではなく、上がり目である可能性が出てくる。そこで、ピッチの上がり目を「で表記すると、表11のように整理することができる。

表 11 弘前方言の名詞のアクセント体系

アクセント	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
1	手:「te 「temo	猿:「saru 「sarumo	狐:「kitune 「kitunemo	糠米:「urukome 「urukomemo
2		花:ha「na ha「namo	兎:u「sagi u「sagimo	手袋:te「bukuro te「bukuromo
3			男:oto「ko oto「komo	果物:kuda「mono kuda「monomo
4				雷 :kamina「ri kamina「rimo
0	葉:ha hamo	鼻:hana hanamo	桜:sakura sakuramo	友達:tomodati tomodatimo

ピッチの上がり目（「）を昇り核（ascending kernel）と呼ぶ。「手」「猿」「狐」「糠米」は第1拍目に昇り核を持つ語、「花」「兎」「手袋」は第2拍目に昇り核を持つ語、「男」「果物」は第3拍目に昇り核を持つ語、「雷」は第4拍目に昇り核を持つ語、「葉」「鼻」「桜」「友達」は昇り核を持たない語である。昇り核を持たない語は末尾が上昇するが、これは句（文節）の音調と考えられる。

## 6 アクセントの地域差の形成

以上、4地点のアクセントシステムの異同を見てきた。これらの異同がどのようにして形成されたのかを考えるために、各地のアクセント型の対応関係を見てみよう。表12を見ると、各地のアクセント型はきれいな対応関係を持っている。このことは、これらのアクセントが共通の祖から生まれた兄弟関係にあることを示している。

表 12 2拍名詞のアクセント型の対応

金田一の類	語	京都	東京	弘前	鹿児島
		式と下げ核	下げ核	昇り核	二型
第1類	飴, 風, 酒, 鼻	H0	0	0	A型
第2類	石, 歌, 音, 橋	H1	2		
第3類	足, 色, 花, 山			2	B型
第4類	稲, 空, 帯, 箸	L0	1	2(第2拍広母音)	
第5類	秋, 猿, 雨・窓	L1		1(第2拍狭母音)	

日本語諸方言の祖型は、鹿児島方言のA型・B型、京都方言の「2つの式」、および東京方言の「下げ核」、弘前方言の「昇り核」が生み出せるような体系を持っていたはずである。そこで、図2では「2種類の式」と「2種類の核」を持つ体系を祖体系として設定している。このうち、2種類の式を保持し、核の種類が「下げ核」に統合されたのが京都方言、式の特徴を保持せず、核の種類が「下げ核」に統合されたのが東京方言、「昇り核」に統

合されたのが弘前方言，2種類の式を保持し，核の特徴を保持していないのが鹿児島方言である。なお，東京方言のアクセントは京都方言のアクセントから変化した体系であることが金田一（1954）等により明らかにされている。

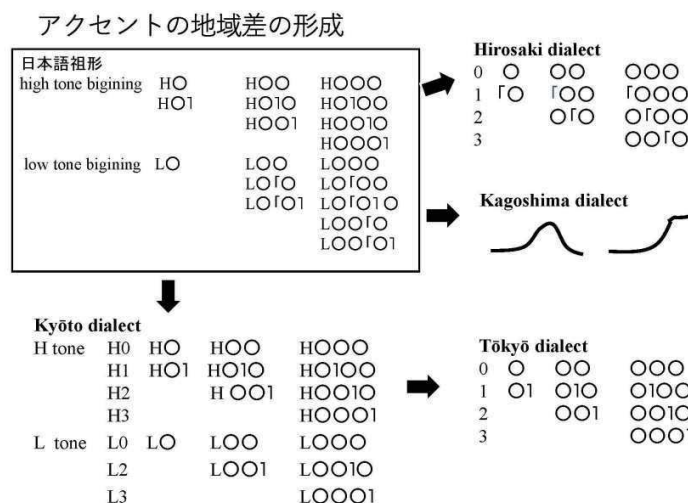


図2 アクセントの地域差の形成に関する試案

琉球諸方言のアクセントについては，近年，調査と研究が急速に進みつつある。多くの地域で3型アクセント体系，2型アクセント体系が報告されているが，与論方言のように昇り核による多型アクセント体系も見つかっており，琉球祖語のアクセントがどのような体系であったかは，今後の調査研究にまっところが大きい。本土諸方言との関係については，金田一の類の2拍名詞1・2類語において，平安京都語や本土の外輪方言と琉球諸方言との間にきれいな対応関係が見られることから，本土諸方言と琉球諸方言が共通の祖（日流祖語）にさかのぼることは間違いない。ただし，詳細については，やはり今後の調査研究にまっところが大きい。

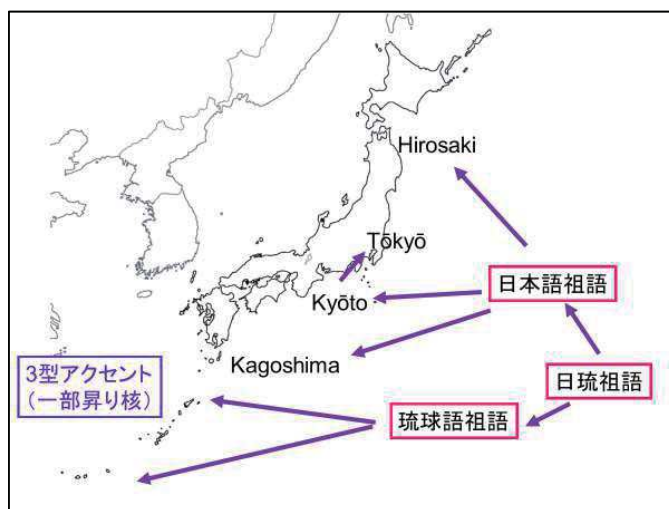


図3 祖語のアクセントに関するイメージ



## 参考文献

- 上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』pp. 281-321, 岩波書店.
- 上野善道(1989b)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2』pp178-205, 明治書院.
- 上野善道(2003)「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座3 音韻・音声』, pp. 61-84, 朝倉書店.
- 川上 葵(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院.
- 木部暢子(2002)「方言のアクセント」『朝倉日本語講座10 方言』pp. 50-67, 朝倉書店.
- 木部暢子(2010)「方言アクセントの誕生」, 『国立国語研究所プロジェクトレビュー』2, pp. 23-35, 国立国語研究所.
- 小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄(2008)『方言の形成』, 222pp, 岩波書店.
- 金田一春彦(1954)「東西両アクセントの違いが出来るまで」『文学』22-8, pp. 63-84.
- 金田一春彦監修 秋永一枝編(2013)『新明解アクセント辞典』, 三省堂.
- 小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄, 2008, 『方言の形成』, 222pp, 東京: 岩波書店.
- 杉藤美代子(1982)『日本語アクセントの研究』三省堂.
- 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店.
- 平山輝男(1951)『九州方言音調の研究』学界之指針社.
- 和田 実(1962)「アクセント」『方言学概説』pp. 162-208, 武蔵野書院.

## 付記

本稿は、2015年1月30・31日に開催された東京外国語大学大学院国際日本研究院主催の国際シンポジウム「国際日本研究—対話・交流・ダイナミクス」で発表した内容に修正を加えたものである。